

# 白隠の禪と念仏について

## 荻 須 純 道

白隠慧鶴（一六八五—一七六八）は近世禪を打立てた禪門中興の祖といわれる禪傑である。白隠が生存した近世において念仏の浄土門は隆盛であり、念仏は庶民の間に拡がっていった。白隠はこの念仏に対して、いかなる見解をもっていたであろうか。

近世においては禪も庶民性をもつようになり、庶民教化のために念仏禪を唱道した禅僧もあった。妙心寺の雲居希膺（一五八二—一六五九）は白隠よりおよそ百年前の人であるが、伊達政宗に招かれて松島瑞巖寺の開祖となり、政宗の夫人（陽徳）のために往生要歌百八首を作り、念仏の唱導を実践したのである。もっとも雲居が松島に到着する

白隠の禪と念仏について（荻須）

以前に政宗は没したので、伊達藩はその嗣子忠宗の時代であり、政宗の夫人はすでに未亡人であった。雲居が唱導する念仏を夫人の侍女らが異口同音に唱和した。これはやがて一般庶民にもたちまち拡がっていった。もとより雲居の念仏は唯心の浄土・己身の弥陀を立てる禪的立場であったことはいうまでもない。<sup>①</sup>

黄檗の隠元隆琦（一五九二—一六七三）の禪風は持戒禪的であるが、一方また念仏禪の性格ももっていた。隠元が来朝したのは承応三年（一六五四）であり、没したのは延宝元年（一六七三）で、白隠より九十五年前に没しているが、その門下法孫の活動は白隠のころまでは旺盛を極めていた。

隠元の禪風が同じ臨濟禪でありながら、従前わが国に伝

承して来たものと異なる性格をもっているのは如何なる理由であろうか。元明の禅界は禅淨双修の傾向が強く、これを大成したのが明の雲棲株宏（一五三五—一六一五）であった。かれは杭州雲棲山に住して禅淨を双修し、もっぱら著述に従った。かれが心血をそそいで著した書物は三十余种三百余巻といわれる。禅関策進二巻・緇門崇行録一巻・竹窓隨筆六巻等世に知られるが、その他に阿弥陀經疏鈔四巻などを作って阿弥陀經の研鑽をなし、また戒に関する焚網菩薩戒經義疏發隱五巻などがある。周知のごとく元朝はラマ教を国教にしたことから、従来の仏教は圧迫されて来たため、仏教諸宗派は大団団結する必要があった。このため雲棲株宏は戒を基底として禅と念仏とを融合させし混一なる仏教を樹立させようとしたもので、明末仏教界におおくなる影響を与えた。隠元禅の性格が持戒的性格をもった禅であるとともに念仏禅の性格をもっていたのも明代仏教の一般的傾向であった。

二

白隠の念仏観については、かれの著遠羅天釜統集おらてがまに記さ

れている。遠羅天釜とは白隠が用いていた茶釜のことであるといわれる。この統集に念仏と公案の優劣を問われて答えた書が記載されている。遠羅天釜統集の冒頭に

答念仏與公案優劣如何問上書

先書に正念工夫相統不斷の助に念仏せよと勸むる者も是れ有り如何

趙州の無字と一般なりとせんか、將た又別に仔細ありやの御尋、叮嚀なる思召に候。◎

として論述を試みている。誰に問われて答えた書であるかということであるが、この書の終末に「老僧最後の親切の一着あり、眉毛を惜しまず、殿下のために挙揚し去らん」とあり、何処かの藩主に与えたものと思つていた。ところ、同じ遠羅天釜統集に所収される「答客難」に

鍋島侯馳書致三之間。師叩三兩端二而竭焉。可謂視三針於霧海一還三珠於合浦一者也。◎

とあるから、この「念仏と公案との優劣如何を問ふに答ふる書」は鍋島侯に与えたものであろう。

白隠は武士に与えた書であるから、武器にたとえて叙述を試みている。人を殺すのに刃をもつてすることもあり、鎗をもつてすることもあるが、刃と鎗との武器は異つても

殺すことにおいては二つはない。ただ武器をとる人の利鈍と真偽によるものである。学道もまた同じで、坐禅したり誦経諷呪したり、または念仏したりして、無明の暗窟を踏蹴し、五官の本能を断つて正智を得、さとの大事をなしとげることについては、禅も念仏も所証はひとつである。戦の勝敗も大将の賢と不肖によるものであり、勇猛心によるもので、軍勢の多少や武器の長短によるものではなく、学道の工夫もまたおなじであるといい、禅と念仏との実践的態度において次のようについている。

一人あり、常に趙州の無の字を挙揚し、一人あり、常に專唱称名せんに、無の字を挙する人は工夫純ならず、志念堅からずんば、縦ひ挙して十年二十年を経るとも、何の利益か有らん。称名の行者は、打成一片に称名し、純一無雑に専称して穢土を覩せず、浄土を求めず、一氣に進んで退かずんば、五日三日乃至十日を待たずして三昧発得し、仏智煥發して立地に往生の大事を決定せん。往生とは何をか云ふや。畢竟見性の一着なり。<sup>④</sup>

禅の修行者も念仏行者も志念の問題であり、求道心の問題であることを白隠は指摘している。禅を修道するため無字を挙して十年二十年工夫しても、求道心熾烈でなく純粹

白隠の禅と念仏について（荻須）

性がなければなんの利益もない。また念仏行者が純一無雑に称名し、阿弥陀経にもあるように、もしくは一日、乃至は七日一心不乱であるならば、三昧を発得し仏智を煥發して往生の大事を決定するであろう。往生とは見性の一着なりと白隠はいつている。白隠は「穢土を覩せず、浄土を求めず、一氣に進んで退かずんば」といつているが、この点白隠は往生要集などという「遠離穢土・欣求浄土」を基調とした浄土教の念仏者とは異なるものがある。

かつて夢窓は夢中間答に了義と不了義ということをいつた。了義とは凡夫と仏、穢土と浄土といったように差別して考えるのではなく、凡聖一如・淨穢不二を意味するもので、差別して考えるのを不了義とするのである。<sup>⑤</sup> この点「遠離穢土・欣求浄土」の思想とは異なるものがある。いま白隠がしめす念仏の態度も、穢土を覩せず、浄土を求めず、不退転の心念をもって一氣にすすめば、三昧を発得し往生の大事を決定するであろうとするのも、ここにあると思うのである。

念仏を唱えることは易いが、禅の修行は難しいといったような、禅と念仏が別々に二つあると思うのは誤りであると白隠はいつている。浄土教では禅は聖道門で難行である

白隠の禪と念仏について荻須

が、念仏を唱える浄土門は易行であるといわれている。このことに関し、

若し無の字と称名と両般の看を成さば、須らく知るべし。尽く是れ邪魔外道の種族なり。悲しむ所は今時浄業の行者は、往々諸仏の本志を知らず、西方に仏ありとのみ信じて、西方は自己の心源なりということを知らず、念仏の功課(効果)に依って、虚空を飛過して、死後西方へ行かんとのみ覚悟す。一生苦吟して往生の素懐を遂ぐることをはず。云云<sup>⑥</sup>

と念仏行者をきびしく批判し、西方とは自己の心源であるとしている。白隠は了義不二の立場をとるから、「十方仏土中唯一乘法」とか「仏身は法界に充滿して、普く一切群生の前に現す」などの語句を引き、もし仏が西方のみにおわすなら、一切群生の前に現われたもうことではないであろうし、また一切群生の前に現われられるなら四方のみに限ったことはない。悲しいことに如来の清浄な真身は目前にあっても、慧眼がないから仏を見たてまつることができないのであるといっている。

浄土門で念仏を唱和するにあたって「光明遍照十方世界云云」と唱える語は、弥陀の光明が遍く十万の世界を照ら

すということであろう。しかし白隠は光明と世界とを二つに考えてはいけないというのである。やはり白隠は了義不二の見解に立つからである。さるときは十方世界草木国土はすべて如来清浄光明の真身であるが、迷うときは如来清浄光明の真身をあやまって十方世界草木国土とするのであるという。このことにつき白隠は金剛經の「若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、此の人邪道を行じて、如来を見ること能はじ」<sup>⑦</sup>の偈を引用し、色や音聲などのわれわれの認識できる形相にあらわれたものをもって仏を求めるなら誤ちであるということをしめしている。では真の念仏行はいかにあるべきかということにつき、白隠は次のようにいっている。

真正の浄業の行者は——中略——生を覩せず、死を覩せず、心失念せず、心顛倒せず、となへ唱へて一心不乱の田地に到って、忽然として大地現前し、往生決定す。此の人を指して真正見性の人とす。<sup>⑧</sup>

白隠はまた往生の語義を規程して、「往」とは專唱称名、一念不生、放身捨命の端的をいうのであるという。放身捨命して生もなく死もなく、ただ一心不乱に称名することであり、三昧を発得して真智が現前するところを「生」

というのであるといい、その真智が煥然として一毫も隔てず涌出して来るのが「来迎」であり、来迎往生は見性の当体であるといっている。

そして白隠は遠羅天釜続集に念仏行者で一心不乱に念仏し、往生を決定した例をあげて語っている。元祿のころ山城に円恕という念仏行者がいた。同志に円愚という人がおり、二人で純一に唱念し、一心不乱の心境にいたって忽然として三昧を発得し、往生の大事を決定した。当時隠元門下の独湛性瑩が遠州初山の宝林寺で黄檗の禅風をあげ、その道聲が高かったから、円恕は遠州初山へゆき、独湛に相見して心境を披瀝し問答するところがあつた。

湛問う「爾は是れ何れの処の人ぞ」

恕曰く「山城」

湛云う「何れの宗をか業とす」

恕曰く「浄業」

湛云う「弥陀如来、多少ぞ」

恕曰く「某甲と同年」

湛云う「爾年多少ぞ」

恕曰く「弥陀と同年」

湛云う「即今何の処にか在る」

白隠の禅と念仏について（荻須）

恕即ち左手を握って少しく握ぐ。

湛驚いて曰く「爾は是れ真箇浄業の人なり」

というやりとりが記されている。そしてもう一人の円愚もまた久しからずして三昧を発得し、大事を決定したと記されている。この円恕は専唱称名によって仏道修行の力を得たものであるが、公案も称名もすべて仏知見を開く助因であつて、仏知見を開くことが諸仏の本志であるから往生といひ、見性というもひとつであるといひ、白隠はいつている。

これを人びとは自力だ他力だと判教し、禅者は念仏行者を見て、見性の大事あることを知らずに、みだりに唱えて十萬億の刹土を過ぎ極楽国土に往こうとするが、十萬億土とは十悪（十善の反対）八邪（八正道の反対）のことであり、仏知見が開明すれば、十悪八邪は氷消し、当処すなわち極楽国土であることを知らないといひ、また念仏行者は禅門の者を見て、如来他力の大誓を信ぜずに自力の我慢で大悟して生死を出でようとしているが、末代下根のわれわれが及ぶべきことではないとしている。仏知見を開明するのに禅や浄土の道があり、念仏や公案は仏知見を開く助因であることをかんがみなければならぬ。ただ肝要なことは仏知見を開く方法論ではなく、一気に進んで退かない不

白隠の禪と念仏について（荻須）

退転の信念である。そこで白隠は当時の念仏行者をさとして、「若し今時に倣って生前に仏力を頼みて、死後の西方に往かんとならば、一生三昧発得、往生決定すること能はじ。況んや真正見性の大事に於てをや」<sup>⑧</sup>といっている。

ただ一氣に進んで退かないといっても、生死の命根を截断しなければとらふな、漕ぎ放たない船のようなもので、日日氣力を勞してももとの湊にあるようなものである。生死の命根とは人間が無量劫来もちつづけている煩惱であり我見である。この命根を断つて無我でなければならぬ。仏教では涅槃に契当する法は無我の一法であるとされている。しかし無我といっても心身怯弱で人を恐れ、己が意志を殺して万縁に応じ、罵られても瞋いからず、打たれても氣にせず、痴々呆々として一智をも増すことなくても、ただ無我を得れば足れりとして、無知昏愚なるがごときは真正の無我ではない。真正の無我とは嶮崖に手を撒はなつて、絶後に蘇るといわれ、一則の公案に参究して、あたかも手脚を着けがたい万仞の嶮崖にあるがごとくで、遂に心身打失し、ふたたび豁然として蘇生した大歡喜で、これを往生といい、見性というので、淨業の人は專念のたすけによって、自性の本源に徹するようはげまされたいと白隠はいつている。

問者は白隠に念仏と公案との優劣を問うたが、禪にせよ念仏にせよ、自性の本源に徹することが見性であり往生である。しかし生前仏力を頼んで死後は必ず西方に往くから一挙兩得であるというような考えであるなら、念仏行を放下せよと、白隠は次のようにいつた。

若しそれ無の字を打ち捨て、仏名を唱ふることは專唱称名の力によりて、見性分明に直に仏祖の骨髓に徹底することを得ば是れ可なり。縦ひ見性明かなることを得ずとも、称名の功力くりきに依りて死後には必ず極楽に往生せん。是れ一挙兩得萬全の良策なりとの底意ならば、早速称名の修行を放下し、純一に無の字を挙揚し玉ふべし。何が故ぞ。これは是れ二百年來禪苑を荒廢し、真風を蠹害する惡風俗、杜撰の禪徒、鄙俗下賤の邪見解なり。<sup>⑩</sup>と、口を極めて念仏禪を破斥し、非難している。

三

思うに宋初、永明延壽（九〇四—九七五）が淨禪を双修し、四料揀を示して一つには禪ありて淨土なきは十人に九は錯路す。

二つには禅なくして浄土あるは万修万人去る。ただ弥陀に見るを得ば、何ぞ開悟せざるを愁へん。云云

三つには禅ありて浄土あるは、なほ角を帯ぶる虎の如し。現世には人師となり、来世には仏祖となる。云云  
四つには禅なく浄土なきは、鉄床竝に銅桂、百劫千生、個の人の依怙を没す。謂ふに既に理性を明めずして、また往生を願はず、永く苦海に沈む。那んぞ出期あらんや。

としたことから、宋代以降念仏禅を修する禅僧が多くなつた。<sup>⑩</sup>

延壽の四料揀で、第三の禅があつて浄土あるものは角を帯ぶ虎のようなものであるが、第一の禅があつても浄土なきものは理性を明めても、長く沙婆に住する中に首楞嚴經にある五十種の陰魔のごとき患いがあり、路を錯るとしてゐる。しかし第二に禅がなくても浄土あるものは万人が救われ、往生するというのである。延壽は万人の救われる道を説き、自らも念仏をし、禅よりも念仏に重点をおいたごとくである。これは宋代以降の禅僧に大きな影響を与え、遂に中国の禅界は念仏禅となり、禅本来の教外別伝の禅はかえって日本に伝つてしまった。

白隠の禅と念仏について（荻須）

さきに一言した明の雲棲株宏（蓮池大師）は永明延壽を讚歎し「永明は西来直指の心印を佩びて、意を浄土に刻す。自利利他、広大の行願、光万世を照らす。それ下生の慈氏（弥勒）か、それ再生の善導か」<sup>⑪</sup> といったといわれる。雲棲は延壽の家風を慕つて禅浄を双修し、阿弥陀經の疏鈔を作るにいたつて、念仏禅を大成したのである。

#### 四

延壽は万人が救われる道を説き、宋代の浄禅一致の潮流は元・明の禅界を風靡し、遂に雲棲の出現をみたのである。しかし白隠はかれを禅苑を荒廢し、真風をむしばみ害するものとして破斥したのである。白隠をしていわしむれば、禅は孤危嶮峻を貴び、上々根の人に利があり、中下の機はかえりみないというのである。しかし浄土教はこれに反する。阿弥陀仏の四十八願によって中下の機のために設けられ、無智昏愚の衆生を利し、十悪五逆の罪累を抜くといわれ、念仏の衆生を攝取して捨てたまわずとされる。法然の一枚起請文には「縦い一代の法を学せりとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じう

して智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」といい、機根が低くあることが要請される。もしも禪門が機根が高くなければならないことを嫌って、これを廢するならば、仏心向上の真風は泯絶するであらうし、また浄土教が機根が低くあることを嫌ってしまえば、昏愚無智のものは悪趣を出ることができなくなるといつている。このように禪と浄土とは求道者の機根の相違が問題である。禪道修行者は心身をひきしめ孤危峭峻の道によじのぼる願心がなければ得られない。念仏を行じて一心不乱の田地に到達するならば、根本の究竟をきわめたことにはなるが、ただ禪と念仏とを併修して、たとえ見性を得られなくても、称名の功力くりきによって死後はかならず極樂に往生するのであるから、禪と念仏とを併修することが一挙兩得の良策であるという底意であるならば、称名の行を捨てて純一無字を挙揚せよと白隠はいい、禪と念仏とを両端にわたって修行することを誠めている。

禪の修行には疑團をもてという。大疑のもとに大悟ありといひ、話頭（公案）を疑わざるを大病とするとまで古来いわれて来た。求道者は疑團をもつことよって情念を断ち、無明を破つてさどりの境界きやうがいを得るものとされる。白隠

は疑團について、次のようなことをいつている。如何が大疑現前する事を得んとならば、静処を好まず、動処を捨てず、我が此の臍輪氣海、總に是れ趙州の無の字、何の道理かあると。一切の情念思想を抛下して、單々に参究せんに、大疑現前せざる底は半箇も又無けん。如上の大疑現前、純一無雜の体裁を聞き及ばれては、怪しく恐しく氣味悪き事に思召さるべけれども、無量劫來の生死の重関を踏破し、十方の如来本覚の内証に徹底する程の目出度大事なるものを、左ばかりの艱辛はあらで、あるべきと覚悟是れあるべし。熟々顧ふに無の字を参究して、大疑現前し、大死一番して、大歡喜を得る底は、兩三箇ならでは聞き及ばずなん侍り。<sup>⑧</sup>

このように白隠が無字に参究すればかならず疑團がおこり、疑團によってさどりの大歡喜を得るといつている。無字の参究には疑團がおこりやすいが、名号は疑團がおこり難いといひ、西天二十八祖・東土六祖をはじめ、禪のさかんな梁・陳・隋・唐・宋の大宗匠は孤危の宗風を立て、願輪に答うつて宗風が地に墜ちなじようつとめて来た。しかし延壽が淨禪を双修して以来、念仏禪を唱える禪僧があり、明代にいたって遂に雲棲祿宏の出現をみるにいたつ



た。白隠は雲棲を口を極めて非難している。

かつて白隠は雲棲が撰述した「禅関策進」を松木瑞雲寺の曝書で手にし、披見したとき慈明引錐の話を読んで感激し、<sup>⑧</sup> 仏道修行への心をかため、この書を師友として座右からはなさなかった。しかし孤危峭峻の道を歩んで徹底大悟し、当時の禅界を見たとき、禅界を毒しているものは禅僧にして念仏を唱えることであつた。それでかれはその影響を与えた雲棲を誹謗しなければならなかつた。白隠が出現する以前に隠元の来朝があり、斬新な黄檗禅が世を風靡していた隠元は臨濟禅の系統であるが、従前の禅と異なる特色は持戒の性格が強かつたことである。しかしまた同時に念仏禅的なものもあり、門下の独湛性瑩のごときは専ら念仏誦経をこととした。たとえそれが「唯心の浄土・己身の弥陀」を標榜した念仏であつても、伝道される対機の受けとりかたは孤危峭峻の道を選ばないであろう。白隠が恐れたのはこのことであつたと思われる。

思うに元がラマ教を国教にして以来、従来の仏教は圧迫されて来たので、これに対処するため禅浄二宗は一致連合するにいたつた。雲棲は阿弥陀経疏鈔四卷・往生集一卷等を作り、禅と念仏とを融合する役割を演じた。それ以来念

白隠の禅と念仏について（荻須）

仏禅は中国はもちろん、日本においてもさかんとなり、このままでは禅本来の孤危の宗風は地に墜ちるものとして、白隠は憂慮したのである。

しかし白隠は浄土教の宗旨をないがしろにしたり、専唱の修行を軽んじたりしたのではない。禅門にありながら禅道に力めず、念仏をすすめる輩を非難したのである。

大明以来、此党甚だ多し。尽く是れ庸才懦弱の禅徒なり。三十年前さる老宿の悲嘆せられけるは、嗟衰へたる哉。向後三百年を過ぎば、天下の禅苑尽く総盤を張り、木鐘（証）を据ゑ、六時礼讃、四隣を驚かすに至たらんと云うて落涙せられける由、寔に恐るべし。老僧最後の親切の一着あり。眉毛を惜しまず、殿下のために挙揚し去らん。一喝の会を作す事なかれ。陀羅尼の会を作す事なかれ。況んや崑崙に棗を呑み玉はんをや。作麼か、是れ親切の一句。

僧、趙州に問ふ。狗子に還つて仏性ありや否や。

州曰く、無。

穴賢<sup>⑨</sup>

白隠は鍋島侯のために眉毛を惜しまず、向上の一句を示めそうという。眉毛を惜しまずとは嘘をいう眉毛が抜けるといわれるが、あえて眉毛を惜しまず真実を申しあげた

白隠の禪と念仏について (荻影)

い。どうか一喝して退けず、意味のわからぬ陀羅尼のような会得でなく、また崑崙の棗をまる呑みにすることなく体得して欲しいといい、趙州無字の公案を授けている。白隠が念仏禪を破斥したことは随処に見られるが、白隠以降、禪の宗匠で念仏を唱えすすめた禪者はなかったと思われる。

〔註〕

- ① 拙稿「日本近世における禅僧の念仏教化について——雲居禅師を中心として——」(惠谷先生古稀記念浄教の思想と文化所収)
- ② 遠羅天釜統集(白隠和尚全集巻五)
- ③ 遠羅天釜統集所収「答客難」(白隠和尚全集巻五)
- ④ 遠羅天釜統集(白隠和尚全集巻五)
- ⑤ 拙稿「夢窓国師の浄土教観」(福井博士頌壽記念東洋文化論集所収)

- ⑥ 遠羅天釜統集(白隠和尚全集巻五)
- ⑦ 金剛経法身非相分第二十六(大正蔵八、四)
- ⑧ 遠羅天釜統集(白隠和尚全集巻五)
- ⑨ 全上
- ⑩ 全上
- ⑪ 拙著「日本中世禅宗史」一七六頁参照
- ⑫ 禅祖念仏集巻上(日本仏教全書所収)
- ⑬ 遠羅天釜統集(白隠和尚全集巻五)
- ⑭ 龍沢開祖神機独妙禅師年譜 宝永元年の条(白隠和尚全集巻一)

一) 瞑目黙嚙。任手把著。得二一小冊一。名二禅関策進一。頂受披レ之。即撞二著引錐自刺之章一。其首書曰。昔慈明在二汾陽一時。與二大愚瑯琊等六七人一結伴参究。河東苦寒。衆人憚レ之。明独通宵坐不レ睡。自責曰。古人刻苦。光明必盛大。我又何人。生無レ益二干時一。死不レ知二千人一。於レ理有二何益一。即引レ錐自刺二其股一。師至レ此発二宿習智一。再生二決定心一。以二策進一為二日新之銘一。

- ⑮ 遠羅天釜統集(白隠和尚全集巻五)